



Title	マドリー便り
Author(s)	中岡, 省治
Citation	Estudios Hispánicos. 1968, 1, p. 84-92
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93561
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

マドリ－便り

中 岡 省 治

12月20日 Madrid にて

9月22日, Madrid, Barajas 空港で, **Comisaría General de Fronteras, Aeropuerto de Barajas-22 Sept. 1967 Entrada** との入国査証を受け、憧れの国イスパニアにやってきました。パリから **Iberia**で約1時間半程たったでしょうか、食事が出て、お腹が大きくなって、ぼんやりしている内に、すでに飛行機はイスパニア上空、ふと下を見ると、地図の等高線のような縞模様が幾重にも、幾重にも、赤ちやけたレンガ色の土地に拡がり、これが見渡す限りずっと向うにまでおよんでいるのでした。着陸態勢に入った飛行機が機首を下げて行くにつれて、これまでは見えなかった緑が、ほんの申し訳程度、あちこちに見え、その付近にレンガ色の屋根、白い壁の家々が何軒か、身を寄せ合うように建てられているのも視野に入ってきました。時には、修道院と覚しき建物一棟だけが、荒涼としたレンガ色の土地に淋し気に、ぽっんとその姿を見せていることもありました。 **Castilla es árida y seca...** という **Azorín** の文章が頭に浮んでくると共に、これまで空から見てきたドイツ、フランスの木々がおい茂り、緑に恵まれた土地とのあまりにも大きな差に、ただ驚くばかりでした。またヨーロッパでも、イスパニアは何と不利な自然条件の下に置かれたのかという印象、配合の神があるとすれば、その不公平さをなじりたい気持ちにもなった程、きらぎらと照り映える9月の太陽の下に、その姿を見せた **Castilla** の強烈な印象は、始めて見るイスパニアということも手伝ってか、いまでも臉の奥にありありと残っています。

空港でのできごとを二つ程。飛行機から地上に降りようとした瞬間、色眼鏡をし、カメラを持った人がいて、乗客1人1人の写真をとっているのので、「ここは外国人の入国については嚴重なのかな……」と思いながら、市内向けのバスに乗り込んだ時、先程パチ、パチとやっていた男が現われ、次々にバスに乗って発車を待っている人達に、でき上った写真を見せて回って行くのでした。こちらが、早合点をし、私服の刑事と思い込んだ人、

実は写真屋だったので、自分で馬鹿らしいやら、おかしいやらで、ふと気がつくと、呆然として、写真を手には、バスの一座席に坐っていました。商魂のたくましさは、いずこも同じということでしょう。いま一つ、税関での荷物検査の時、故意ではなかったのですが、偶然、西語部会名簿が最初に開いたカバンの一番上に現われたのです。国沢先生から、在 **Madrid** の先輩諸氏に手渡すようお話があって、持ってきたものだったのです。これを見た税関吏の太ったおじさん、 ¡Oh, está escrito en español! といい、小生の入国の目的を聞いた後、「勉強にきたんですか、お元気で」といいながら、残りの荷物を見ようともせず、チョークで **V (Visto)** の印を付けてくれました。

こんなことがあって3ヵ月になります。現在 **Residencia de Relaciones Culturales** という、外務省文化局管轄の寮に住んでいますが、当所はイスパニア政府の奨学生のため、文化局が、部屋の内いくつかを予約している関係で、われわれ奨学生は1日 120 **pesetas** で、食・住が保証されています。現在 **Madrid** で少しいい下宿を3食付きで求めるとなれば、最低5,000 **pesetas** は必要との話を聞くことがあり、これを見ても1日 120 **pesetas** というのは全く恵まれた条件といえます。食事は朝がかの有名な **Café con leche** にパン（バター、マーマレード付き）、昼はスープ、次には大体豆またはジャガイモを主体とした煮込料理、次いで肉類（金曜日はやはり魚が出ます）、デザートは果物というのが普通で、夜はスープ、肉ないしは卵料理、果物との献立で、諸先生方からおうかがいしていたイスパニア人は食事にはやかましいという点をこの食事を見て認識しているような次第です。オリーブ油については、外国人が寮生の半数以上を占めている点を考慮してか、覚悟していた程に多量に使われていないのも、普段淡泊な食事をしている日本人にとっては実に有難いことです。

こちらで3ヵ月程生活してみて、どうもぴったりとしないのが、1日の区分方法です。大体の仕事始めは8時半か9時頃だと思いますが、これから1時半、2時頃まで、午前中の仕事が続くようです。官庁、銀行等はこれで仕事を終え、3時頃には皆退庁、退社するそうですが、一般の会社は、また午後4時半頃から7時半、8時頃まで仕事を続けています。私達にもおなじみの **Aguilar** 社、**Espasa-Calpe** 社も4時半から8時までが午後の店を開けている時間で、特に1ヵ月程は全くとまどいました。この間は

bar, cafetería を除いて全部 cerrado との札を入口に掲げ仕事をしません。百貨店しかり，スーパーマーケットもしかりです。所で，この間に，従業員諸氏，諸嬢は自宅に帰り，昼食を済ませ，再び出社となる訳ですので，2 時前後に Madrid 中心街から住宅地に向うバス，4 時過ぎに Madrid 中心街に向う地下鉄は満員で，特に地下鉄は，どこまで行っても 2 pesetas なので，ひどい混みようです。さて，例の午睡の件ですが，2 時間程で家に帰り，食事を済ませ，また出社ということになれば，事実上，午睡をとるひまはないようです。この点を数人のイスパニア人にたずねてみましたが，「時間がないので……」とか「仕事にさしつかえるので……」とかの返事がありました。間違っているかも知れませんが，こういった習慣も，国際都市 Madrid では，維持し難くなっているようすでかなり恵まれた条件下に生活している人でない限り，昼食後必ずひるねをして，ということは許されなくなっていると思います。ともかく日本的な 1 日の分割の観念は全然通じません。Una y media de la mañana という表現もなる程とうなずけるようになりました。当Residencia でも 1 時半—3 時が昼食時間となっています。いま一つ困るのは夕食時間が 10 時—11 時で，始めの 1 カ月程は，皆で夕食時に集まっては，「遅い遅い」と不平を鳴らしていたのですが，いまは皆，郷に入れば……の心境でしょうか，あまりいわなくなりました。またわれわれに食事を運んでくれる señorita に「遅いね」といった所，けげんそうな表情で，大きな黒い目をクリクリさせて，不可解といったようすでしたし，また聞く所では，夏には，11 時に夕食をする家庭もあるそうで，いま更ながら驚き入っているような次第です。ここの職員の人も，やってくる外人全部が，夕食が遅いというと話されていたので，10 時—11 時の夕食には，皆閉口するようすです。しかし 2 時に食事をして 10 時まで何も食べずにいるということは，健康な人間にとっては全く不可能なことです。そこで大体，7 時前には merienda (café con leche ないしはビールに bocadillo = パンにハム，ソーセージをはさんだもの) を食べているようです。最初の頃は，10 時にお腹を一杯にするものですから，なかなか熟睡できず，眠っている間にお腹がグーグー鳴るとか，夢を見て仕様がなとか，当所の日本人 4 名集まっては，こぼしたのですが，いまは少し賢くなって，夕食は少し遠慮をして食べるという作戦が功を奏したのででしょうか，また胃の方もようやくこの遅い（日本人的感觉？）夕食

に慣れたのでしょうか、そういった訴えも少なくなってきました。こちらにも、寮生の便を考えてのことでありましょう、**bar** が設置され、アルコール類、その他の飲物、パンといったものがありますので、わざわざ外に出て行く必要のないのは結構なのですが、案外こういった面での出費も大きいのではないかと思います。**Madrid** 市内に無数にある **bar** で 12 時前、6 時半頃に、**café con leche** に **bocadillo** をつまみ、**merienda** としやれ込んでいる人達を多く見掛けますが、皆テーブルに坐らず、カウンターの前に立ちはだかって、いわゆる立ち食いというのをやっています。砂糖を包んだ小さな紙、手をふく紙を遠慮なく足許に捨てるので、足許は紙で一杯になっていますが、そんなことには構わず、イスパニア人は大いに食べ、**merienda** の一時を楽しんでいるようすです。先日もある **bar** で、街にある “**Mantenga limpio Madrid**” というポスターをもじって、誰かが “**Mantenga limpio el bar**” といったので、皆大笑いをしたこともありました。この朝の **merienda** の時、12 時前には、大学の **bar** も **merienda** をとる学生で満員となっています。

さて、今度は、小生が現在、授業を拝聴させてもらっております **Facultad de Filosofía y Letras** について少し書きたいと思います。朝は 8 時 45 分に授業開始となり、1 時間きざみで、午前中 4 回、大体 1 時 45 分まで授業が行なわれます。で日本のように週 1 回、1 時間というのは、**Curso Doctorado** を除いてはあまりなく、普通は、同一課目の授業が週 3 回ある場合が多いようです。特に文学部での特徴としては、女性が圧倒的多数を占めていること（70% 程度ではないかとの印象です）—他の学部でも、例えば **Facultad de Política y Económicas** でも、前者では女性が 75% にも達するのではないかとの話ですが—と、最近 10 年程の傾向として、大学進学希望者が急増したための学生数の多いことです。特に小さな教室では、椅子不足のため、立って授業を受けている人の姿をも見るがありますが、大権威の **Lapesa** 教授も、初回の授業で、この点について、「私が恩師、**Américo Castro** 教授の許で勉強した時には、総勢 7 人であった。勿論円いテーブルをかこんで授業をきいたものであって、疑問が出れば、直ぐに背後の書架から辞書を引出し、先生と共に疑問点の解明をしたものだったが、いまはこれは望めないことなので、せめても、疑問が生じた場合には、これを放置せず、必ず質問をするように」との話がありました。そ

の後、ある問題について、話し終わられると直ちに “¿Está claro todo?” とのことばがあり、これに対し、よく学生側から質問がとび出すといった光景がしばしばです。その他の授業でも先生方の “Repito...” という表現をよく聞くのですが、これも多人数授業に対する教授側の配慮の表われなのでしょう。大体、9時40分、10時40分頃になると、地上4階、地下1階の哲文学部の各階要所に机を置き、諸事万端をおおせつかっている **bedel** 氏が扉を開き “La hora” と告げにやってきます。普通ベルの取付けはあまりないようで、教授が話に夢中になっておられる時など、近くの学生諸氏が、「もっと大きな声で」とか「もっと判るように」など注文を付けていることもあります。この合図に対する先生の “Gracias” で授業が終ることとなります。小生の受けた印象としては、授業は口述筆記で進められるのがほとんどで、最初の授業で、参考書の紹介がありましたが、2回目からは口述筆記形式なので、始終聞き逃したり、聞き取れなかったりで、授業の後、部屋に帰って、ノートを見ると、自分でも何を書いてきたのか判らないこともこれまでに何度もあり、全くいやになってしまうことさえ、度々あるのです。小生だけかも知れませんが、この点、大いに苦勞をし、また自分の力不足をはずかしく思うことばかりです。これはさておき、学生側は、そのノートを元に参考書を見て、勉強しなければいけないということなのでしょう。特に参考書の中でも、イスパニア語史(1)の場合には、佐藤先生より教えを受けました音声学の権威、**Tomás Navarro** 著 **Manual de la Pronunciación Española** も挙げられていますし、また **Menéndez Pidal** 著 **Gramática Histórica Española** 等これまで、いろいろお世話になっているものがありましたが、中でも前者は学期始めより、12月中旬までは品切れ、売切れという状態で、なかなか入手困難でした。いま一つ印象的であったのは、**Dámaso Alonso** 教授で、その担当の **Filología Románica** にあって、ラテン語の成立、伝播を説かれた時、その中心となった **Roma** と、片やイベリア半島における **Castilla** が **Pequeño Rincón** から指導的地位を持つに至った過程、また両者を取りまく諸条件の類似性を力説されたこと、また **Romania** の分裂という現象を前に、イスパニア語圏にも同一の理論を当てはめ得るか、否かについても声を高めて話されたことでした。その他、2, 3気の付いたことがあります。学生数の多いために、前のいい席をとるには、かなり早くからきて、扉の前で

待っていなければいけないようで皆いらいしながら授業を終えた人が出てしまうのを待っています。中には全部出てしまわない内に入ろうとする人もあって、このような場合、ふと扉を開いて “Pase usted” と自分よりも先にこちらを入れてくれるイスパニア人と対照的だなと考えることもあります。交代時間、特に階段はちょっとした駅のような混雑ぶりで、特に学部授業の外に、**Diploma de Estudios Hispánicos, Curso para Extranjeros** という外国人講座が開かれ、これに加えて、**Universidad de Nueva York en Madrid** のようにアメリカの数大学が、ここ **Madrid** 大学に講座を設置していることから、いわゆる施設面では、いまや手一杯という感じを受けます。これに対処するためでしょう、広大な敷地のあちこちに建築中とおぼしき建物がいくつも見受けられます。大学の課程は5年に亘り、皆、**preuniversitario** という1年の大学準備コースを踏んで、大学に入ることになるようです。5年の内、最初の2年間は **Estudios Comunes** と称する教養課程で、少し私共の注意を惹くのは、**Religión** という課目が2年次から5年次まで、**Formación Política** という課目が2年次から4年次までであることです。カトリックを信じ、これの擁護のためには労をおしむことのなかったイスパニアのことですから、前者はなる程とうなずけますが、その内容について、2、3の学生にたずねました所、勿論のこと、カトリックに関する講義が行なわれ、後者は一言でいえば、イスパニア政治史のようなものであるとの答をもらいました。現在では必修課目ではなく、**asignaturas complementarias** として、講義が開設されているようです。この教養課程を終えた後、**Período de Licenciatura Especializada** に進むこととなります。哲文学部の便覧によりますと、専門課程は、**Sección de Filosofía, S. de Filología Clásica, S. de Filología Semítica, Licenciatura en Filología Bíblica Trilingüe** (新設間もないようすで、本年は第3課程まで)、**S. de Filología Románica** (ここでイスパニア語学、文学が講義されています)、**S. de Filología Moderna** (ここには、**Subsección Francesa, Inglesa, Alemana, Italiana**があります)、**S. de Historia, S. de Arte, S. de Historia de América** (ここには **Subsección Antropológica Americana** も最近設置されたようすです)、**S. de Ciencias de la Educación** に分かれ、各専攻分野での課程を終えた後、**Período del Doctorado** 1年で、4課目を修め、その後博士論文作成という順序を踏むこ

ととなる訳です。特にイスパニア語を勉強している者にとって、この **Cur-
sos monográficos y asignaturas especiales** の枠の中で行なわれている講
義の数々は、興味この上もないものですが、能力と時間とも相談しなけれ
ばなりませんので、切齒扼腕、あきらめているといったところです。文学
部学生総数は昨年度の統計では本科生3,822名、聴講生1,856名、計 5,678
名ですので、これからも **Madrid** 大学の規模の大きさが推しはかれると
思います。特に聴講生の多いのも特徴の一つでしょうか、授業の始まる前
など、「君はどちらから」といった話をよく皆がしています。周囲を見る
とやはりアメリカ人が圧倒的に多いようで、他のヨーロッパ諸国からの、
中南米からの学生で、日本人も1クラスに単数ということは、小生の聴講
している授業に関しては、5課目の内、ただ一つだけです。外国人が何と
はなしに集まって、それぞれ訛りのあるイスパニア語で、いろいろなこと
を話すこともあります。本年は授業は、12月初旬から、諸学部でスト騒ぎ
があったため、これが長引き、結局はズルズルといった状態で12月16日
(土)にクリスマス休暇に入りました。新年は8日から授業開始となりま
す。3カ月程、夢中で過ごしたので何かほっとした気持ちです。

3カ月程の間に起ったことを2, 3お話しておきます。11月17日(金)
には、国会が招集され、**Franco** 元首がその冒頭演説を行ないましたが、
その模様がテレビ、ラジオでイスパニア全土に流されていました。75才と
は思えない程若々しい声で、またやさしい声でもあり、少し意外でした。
翌18日の新聞に、その演説全文が掲載されたことはいうまでもありません。
それから3日後の19日朝、食堂に下りて行くと、**peseta** の対ドル換算率
が、59.85...から69.52...に下落したとのイスパニアにとってははなはだ
面白くないニュースを聞きました。原因はポンドの切下げにあったらしく、
当 **Residencia** にいる経済学専攻の諸氏がスイスの銀行も取引を停止した
とか、また東京でも為替業務が行なわれていない等、いろいろな関係事項
をきかせてくれました。一政経学部学生の話では20日午前中の授業でイギ
リスのポンド切下げの講義があって、午後同一教授が **peseta** の切下げに
関する授業を行なったものですから、定員300人程の教室に1,000人以上も
の学生がつめかけ、ノートをとることはおろか、みんな立って、すしづめ
になりながら国際通貨の切下げに対する **peseta** の反応についての講義を
聞いたので皆汗びっしりになったそうです。特にこの現象に対する学生

の関心が判るようでした。20日には **Madrid** 市内の外為銀行がドル、その他外貨から **peseta** への換金業務を行なわなかったため、当 **Residencia** に旅行中の宿をとっていた一日本人技師さんが、出発予定の20日に、その任地のデンマークに帰り得ず、「困った、困った」を連発していたのですが、翌21日午後、新レートでの換金が可能となりました。21日夕刊紙 **Madrid** は、1人の靴みがきのおじさんの写真（街路の椅子に腰を下ろし、新聞を見ている姿）を掲載し、その下に、《**Todas las clases se interesaron por la noticia del día : la devaluación de la peseta, tema al que los diarios madrileños dedicaron sus primeras páginas.**》との説明を付していました。また同紙は、第1面に、通産大臣の記者会見のようすをも報じ、“**EL DINERO DE LOS ESPAÑOLES SIGUE VALIENDO EXACTAMENTE LO MISMO**” との **García Moná** 大臣の強気な発言を、**Primeras Reacciones ante la Devaluación** との大目出しの下に挙げてはいますが、片や、**Kodac**, **Fondo de Cultura Económica** が販売を一時的ではあるが停止したとか、ガソリンの値段にこの切下げの影響が現われるのではないかといった暗い面も報じられていました。この緊急事態に対処する政府の施策が同 **Madrid** 紙に詳しく説明されていました。この **peseta** の切下げが落ち着くと共に、今度は **Gibraltar** をめぐってイギリスとの間に問題が生じてきています。12月8日は **ABC** 紙は〈**Gran Provocación Británica en Gibraltar**〉との見出しで、**Gibraltar** 近海におけるイギリスの行動を激しい調子で非難しています。ことの起りは、砲弾を積んだイギリスの貨物船が、イスパニア領海内—**La Línea** 市の西、550mの海上一で、この砲弾の荷揚げを行なったことで、これは、**La Línea** 市を大きな危険にさらすと共に、全くの領海侵害になるとの報道でした。これにともない、外務省からイギリス政府に抗議書が手交されるといったように、**Gibraltar** をめぐる情勢が今度は、新たにイスパニア人の関心事となっています。しかし17日（日）の **ABC** の報ずる国連での中南米諸国案の評決の結果、一応全世界の支持を得られたとして、情勢は落ち着きを見せ、まずイスパニアとイギリスの会談を再開し、次いでは住民の利益等々についても考えて行かねばならないとした第1面の内容で、この問題は一步前進したようです。この **Gibraltar** の問題と共に、ギリシア国王 **Constantino** 殿下の国外退去という事件もイスパニアでは非常に大きく取扱われています。王政をいずれ自

分自身の問題として考えねばならないイスパニアにとって、単なる外国に生じた一政変として受取っておくことができないのかも知れません。

12月も20日を過ぎれば **Madrid** もクリスマスを迎える準備に大わらわです。**Gran Vía** の店には皆、クリスマス大廉売とかで、クリスマスが商業資本にうまくかつがれているさまは全く日本と変わりません。しかし、クリスマス・カードをあれこれと選んでいる人、贈物の特設コーナーであれこれと物色している人、大きな包み紙をかかえて道を行く人、こういった人達を見るにつけ、年の瀬というあわただしさを感じ、また新たな年に新しい希望を託したい思いがします。**Calle de Alcalá, Paseo del Prado, Avenida de la Castellana** といった目抜き通りには、街路樹1本1本に無数の豆電球がつけられ、これが日暮れと共に光りを放ち、**Madrid** の中心地を東西南北に何キロと続くさまは正に華麗、華観といえます。このような人工美と対照的に、現在の **Madrid** は、市内各所で土木工事が大いに進められ、少しほこりっぽくなっています。2年程前に一度こちらにきて、また本年やってきたという一アメリカ人は **Madrid** の変貌に驚き、ビルばかりが沢山建っているといって、少し淋し気に話をしていましたが、**Don Quijote y Sancho** の像で有名な **Plaza de España** にも地下に、急増する自動車のために駐車場ができるそうで、現在、コンクリートの壁が張りめぐらされ、絵葉書で見る《我々こそイスパニアを代表するものなり》という、あの自信あふれたたたずまいは、**Don Quijote** にも、**Sancho** にもなく、何か横に押しやられた風情で、淋しそうな感じだなと思うのは小生一人ではないのだろうと考えて、先日も、この有名な二人の像を眺めていました。自動車の急増で、ラッシュ時には交通停滞も起っています。建築中の高層ビルも、ここかしこに見られますが、こういう近代文明の発展の犠牲となって、本当にイスパニアを代表するもの、イスパニアの真髓が姿を消してしまわないように祈りたい気持ちです。

現在、**Madrid** も冬を迎え、12月17日（土）のイベリア半島での最低気温はそれぞれ **17 grados en Huelva y Málaga, 9 grados bajo cero en Cuenca** で、**7 grados bajo cero en Burgos y Madrid** というように、**Meseta de Castilla** の冷え込みも相当に激しいものです。こちらにやってくる前「寒いよ！」とアルバレス先生からお話があったのですが、その寒さを身をもって味わっている毎日です。